

解 答

(第一日)

一

- ① a 模様 b 巻き貝 c 備わっ d 暮らし e 探し
f 日用品 g 内装 h 電化製品 i 価値観 j 否定
- ② A イ B オ C エ D ウ E ア
- ③ 人間には、生きるうえで、美しさというものを求めずにはいられない本能的な衝動が備わっているから。
- ④ 国や文化が変われば、美的感覚は大きく異なる〔。〕
- ⑤ 異様なゴージャス感にあふれている ⑥ 金びかの飾り
- ⑦ グローバリズムの浸透や情報メディアの普及によって世界中の価値観が似通ってきており、先進国で美しいとされるものが異なる文化や歴史を持つ国でも美しいとされるようになってきているから。
- ⑧ 美しさとはさまざまであり、しかも、それは変化する〔。〕
- ⑨ 欧米の国々
- ⑩ 遠い昔、中国皇帝の息子が、みごとな絵がたくさん飾られている部屋から一歩も出ず、毎日その絵を見て暮らし、絵にある世界だけを美しいと思っていた。
- ⑪ グローバリズムの浸透やテレビやネットなどの情報メディアの普及。
- ⑫ 自分の感じる美しさの中にとどまりつづけること〔をしない。〕

二

- ① イ ② エ ③ ウ ④ ア ⑤ ウ ⑥ イ

三

- ① エ ② イ ③ ウ ④ ウ

(第二日)

一

- ① a 厳格 b 記し c 参上 d 無念 e 痛手
f 評判 g 危害 h 傷 i 気の毒 j 提出
- ② A ウ B エ C ア D オ E イ
- ③ あ 荒くれ者 い 命
- ④ 〔顕季と義光の〕領地争い〔。〕
- ⑤ 明らかにどちらが正しいかははっきりしているのに、白河院はなかなか判断を下さなかったから。
- ⑥ 顕季は土地の権利を記した文書をきちんと保管していたから。
- ⑦ 顕季が義光に危害を加えられたり、名誉を傷つけられたりしてほしくない。
- ⑧ 顕季には治める国もあり、また全国の各地に領地もあり、そして官職もあるから。
- ⑨ 仰せになる
- ⑩ 顕季が義光に土地をゆずってくれたこと。
- ⑪ 夜、顕季が道を歩いていたら危害を加えてくる。
- ⑫ 義光の臣従。

二

- ① 風 ② 雲 ③ 雷 ④ 星 ⑤ 光 ⑥ 露 ⑦ 日

三

- ① ア 役 イ 訳 ② ア 習 イ 修 ③ ア 会 イ 械

解 説

(第一日)

一

- ② A 「シンプルなものがなく、金びかの飾りのついたものしかない」ということは、「言い換えれば」「シックなもの、シンプルなものに興味のよいものとは見なされない」ということです。「言い換える」接続詞が必要です。 B 「金びかの」趣味・志向が「明らかに変わってきた」と、変化を記しています。 C 続く「黒いシンプルな靴」を初め、様々な例が挙げられています。 D 空欄の前後いずれも、良くない現象には違いないのですが「その逆に」と、直前とは「違う種類の」見方を挙げています。 E 王子が生まれてからの暮らしの説明が一段落して、「時が来て部屋から

出ることを許された」と次の段階へと話が転換しています。

- ③ 人間がなぜ「美しいもの」を求め、作り出し、すすんで生活に取り入れるのか、を考えつつ読むと、次の形式段落最後の「大昔から～求めずにはいられない本能的な衝動がそなわっていた」に着目できるはずです。理屈ではなく、「本能的な衝動」で、人は美しいものを求めるのだと述べています。
- ④ 傍線6のような目立つ部分でも、これとほぼ同じことを言っていますので注意しましょう。求められているのは、21字での言い換えですから、より簡潔にまとめているところを探さなくてはなりません。(A)の形式段落で、「なにを美しいと感じるか」＝「美意識」と言い換えて、簡潔に表現しています。
- ⑤ これは直前から答えますので、かなり容易な問題です。電化製品も、「(エジプトの)家具付きアパートの家具と」同様だった、と述べていますので、要点になっている述語部分「異様なゴージャス感にあふれている」を抜き出します。
- ⑥ 「それ」はすぐ前の「金色のライン」や「金ぴかのチョウチョの飾り」を指しています。しかし片方に限定できませんし、字数も合いません。そこで、この二つの特徴をまとめて表現している言葉を探すと、次の行に字数もピッタリの「金ぴかの飾り」を見つけることができます。
- ⑦ まず「このようになった」とはどういうことか、ですが、「エジプトの美的感覚は、異様なほど『ゴージャス』であったのが、近年そうでなくなってきた、シンプルでシックなものが増えてきた」ということですね。このようなシックなものを好む変化が(エジプトで)何故起きたのか、説明しているところを探さないといけません。
- すると、エジプトのみならず、世界中で「価値観が似通ってきている」ことを述べた、二枚目の二段落めに着目できます。筆者は、先進国を中心としたこのような変化を引き起こしたものとして、「グローバリズムの浸透」と「情報メディアの普及」を挙げています。つまり、各国でもの考え方が世界的な視点に変わってきたことや、メディアで世界中に同時に発信される情報から影響を受けたことなどにより、例えば、「シックなものが良い」という先進国の価値観が世界中に広がっていったのだ、と説明しているのです。
- この段落の要点をまとめて、答を作ります。
- ⑧ 二文、三行を24字で延べている部分ですから、本当に簡潔にまとめた表現が必要です。一つは、もう一つは…と二点ポイントがあること意識しましょう。答となる文は「さまざま」がそのまま使われていますし、「変わる」→「変化する」となっているだけです。丁寧に見ていけばすんなり見つけられるはずです。
- ⑨ 次の形式段落に着目しましょう。「ミス・ユニバース」も「シックでシンプルなもの」を好む嗜好も、いずれも「欧米の美意識」が基準だと延べられています。アメリカやヨーロッパのことを「先進国」と表しているのだと理解できます。
- ⑩ 「老絵師の行方」の物語の中では、主人公の王子が「自分の感じる美しさの中にとどまりつづけて」いましたね。もちろん、自ら望んでそうだったのではなく、父皇帝の考え方によってそうになってしまったのですが。「王子が毎日美しい絵だけをながめて、部屋から一步も出ずにくらしていた」という、筋の部分を書くのはもちろん、王子の心のうち(美しい絵の世界を、真実と信じていた)をしっかりと書きましょう。
- ⑪ ⑦参照。「情報」は、どういう考え方のもと、どこから発信されますか。
- ⑫ ⑩参照。「～をしない」のですから、この22字には「心をしなやかにもつ」の逆の内容が求められているとわかります。「老絵師の行方」における王子のようであっては、自ら「美しさを見出す」ことはできない、ということです。

(第二日)

一

- ① A「平和的に解決」することに、こだわる様子です。 B 「当然のことながら」「すぐに」など、顕季の確信のほどが伝わる言葉が続いています。 C 明確な態度をとることを、しぶる様子です。打ち消しの表現が後にくることに注意。 D すぐ前に「かしこまってひかえて」いたとあるように、身分の特別に高い人の前では、思うことを自由に発言するわけにはいきません。何度も促されて初めて、「少しずつ」語り始めたということです。 E 「考えてみる」につながる、決まり文句のような言葉です。「じっくり」「何度も」といった意味ですね。
- ③ あ 義光の人物を説明しているところから四字の言葉を探します。直後の「慈悲の心なぞ持ち合わせていない」がヒントです。い 「あの土地に『』をかける」という同じ言い回しで、白河院が義光の意気込みを説明(一枚目後半)していますので、そちらから抜き出します。
- ④ 義光と顕季が「領地を取り合って、もめている」問題だということはわかりますね。四字という条件に従って探していくと、少し離れてはいますが、二枚目の初めの『領地争い』をしている相手」という表現に着目できるはずです。
- ⑤ 顕季の気持ちは、直前(の同じ文中)に書かれています。「明らかにどちらが正しいかわかってはいるはずなのに(自分の正しいのはご存知のはずなのに)なぜ白河院は何も言ったださらないのか」の部分ですね。前半はこのままでも意味が通じますが、後半「何も言ったださらない」のままでは説明不足ですから、ほぼ抜き出し、で楽をするわけにもいきません。顕季は、義光と自分とどちらが正しい領地の所有者か判断してもらうために、白河院に訴え出たので、「(どちらが正しいか)なかなか判断してくださらない」ことを恨めしく思っているのです。そこを表現しましょう。

- ⑥ 誰に対しても「自分が正しい」と主張するためには、やはり証拠が必要です。東北の領地を「自分の領地」だと証拠だてるものがある、とどこに書かれていたか振り返りましょう。すると、形式段落三段落めの初めに「領地はすべて公的に認められたもので、顕季はその土地の権利をしるした文書をきちんと保管していた」と書かれているのに気づきますね。
- ⑦ 「真意」というのは「本当の気持ち」ということですから、どういうつもりで、「領地を譲れ」と白河院が顕季に言ったのか、次の行からの白河院の言葉をよく読み、まとめます。正しい権利を主張して義光を退けたら、(義光の性格を考えると) 顕季はどんな危害を受けるかわからない、名誉を傷つけられるかもしれない、と、白河院は顕季のことを心配しているのです。
- ⑧ この理由は、白河院の言葉から容易に見つけられますね。「大きな問題とは」ならないことを、白河院は「大きないたで(痛手)には」ならないと述べています。つまり、続く二文「治める〜官職もある」に述べられる三点が理由です。
- ⑨ 「おっしゃる」つまり、「言う」の尊敬語を探しますが、尊敬語が使われている対象は白河院ですから、白河院の言動を表している部分から探せば効率的に見つけられます。
- ⑩ 解答欄の大きさを見れば、求められている字数がだいたい判断できますね。顕季が義光にしてくれたこと(領地を譲ってくれたこと)を、簡潔に述べれば良いということです。
- ⑪ ⑦参照。白河院が顕季のために心配したこと、抱いた恐れを書きます。どういう状況で危害が加えられるか、少し具体的に白河院は想像していましたが、それが「義光がしたと考えられること」ですので、そのまま具体的に書きたいところです。
- ⑫ 義光に領地を譲ったことで、顕季が得たものとは何でしょうか。荒くれ者として名の通った義光は、領地を獲得することに命までかけていましたから、横取りがかなわなければ、顕季にどんな危害を加えたかわかりません。しかし、そこまで土地への思いが強かったからこそ、逆に顕季が大きな心で土地を譲り渡してくれたことに心うたれ、顕季の人柄に心酔したと考えられます。義光は感謝の思いを「臣従」になる、という形で表したのです。顕季は土地を失った代わりに、義光という頼りになる臣従をえた、ということが出来ます。

解 答

一

- ① A エ B ウ C ア D オ E イ F キ G カ
 ② a 立派 b 発揮 c 耕す d 織れ e 肥え f 中断
 ③ それぞれが持っている性質
 ④ 木をなでさする 木のはだにつめを立てる 根元をゆり動かす
 ⑤ 木がそれぞれに持っている性質に従って、その本性を十分にのばしてやる〔というものの。〕
 ⑥ 病気になったり、仕事をする気が起こらなくなったりすること。
 ⑦ 自分もいつも今の役人のやり方はどこかおかしいと思っていたから。
 ⑧ 本当に人々のことを大切にすれば、必要以上に人の生活に口を出さないでよく。

二

- ① A オ B カ C ア D イ E ウ F エ
 ② a 容易 b 印刷 c 読破 d 冷やせ e 愛着 f 発想
 ③ (ア) 本は貴重品であり、一般にはほとんど流通していなかったため、生涯に読める本の冊数が少なかったから。
 (イ) 音楽は生演奏で聴くしかなかったため、生涯に聴くことができた曲の数が限られていたから。
 ④ お金の余裕がなかった〔頃。〕
 ⑤ ひたすら同じ本を読み、同じ C D ばかりを聴いていた、その内容を細部まではっきりと覚えており、自分に非常に大きな影響を与えたものとして特別な愛着を感じられるとき。
 ⑥ 手に入る情報が量的に少なかった世界。
 ⑦ いろいろなタイプの本を読む〔。〕
 ⑧ (ア) 本の選択の可能性が増える。
 (イ) 一体、何を読んで、何を読まなくていいのか、さっぱり分からなくなる。

解 説

一

- ① A 「たいへん (結構)」と同じ意味の言葉です。 B 「実を結ぶ」につながる慣用句です。枝が曲がるほどにたくさんの実がなっている様子を表します。 C 「木というものは」「願うものです」と、本来の木のあり方をうたっています。 D これはオとキでまようところです。しかし、オは他に入りえないことや、「のばそう」にもっとも自然につながることから、オ「ぐんぐん」とを選びます。 E 「全部」という意味の言葉です。 F 「固く」「ぎゅっと」というような意味で使っています。 G 「(必要もないのに) わざわざ」という意味の言葉が入ります。
- ③ 「私を呼ぶにはまことにふさわしい名だ」と彼が言ったのは、実際に彼の歩く様子が「らくだ」に似ていたからです。見た目にしろ、自身の「個性」といえるものだと考えたために、「結構ではないか」と述べ、受け入れたのです。そして、このような考え方が彼にできたのは、「木を育てる」にあたって、「木がそれぞれに持っている性質」を大切にすることを、日々心がけていたからだと考えられます。
- ④ 「直接」という条件があり、「行為」ですので、木に実際に触れていて、悪影響を与えている「行為」を抜き出します。
- ⑤ ③参照。駝が木に接するにあたって大切だと思っていることを探します。駝の長い言葉 (11 行目～) の初めに、「私にできるのは～ことだけなのです」と簡潔にまとめて述べています。
- ⑥ 農民たちが、役人のせいでこうむる「悪い結果」を表しているところを探します。すると、5 行後の「病気になったり、あるいは仕事をする気が起こらなくなったりする」に着目できるはずです。
- ⑦ 「我が意を得たり」とは、「思ったとおりだ」という意味です。何に対して「思ったとおり」なのか。直前の「私の仕事と政治とは、あるいは似ているところがあるのかもしれませんが」という言葉で締めくくられる、駝の言葉に対してです。駝は、木をだめにするように、民をだめにする役人の話をしますが、質問をする人は「役人が民に災いをもたらしている」という内容に大いに共感して「我が意を得たり」と喜びます。その共感の根拠は「私は、いつも今の役人のやり方はどこかおかしいと思って」(後ろから 3 行目) いたという、質問者の言葉から確認できます。
- ⑧ この問題は抜き出しではなく、「できるだけ文中の言葉を使って」というおなじみの条件ありませんから、本文の内容から自分で考えねばなりません。「人々の生活を成り立たせるため」役人にどうせよ、と言っているか。厳密に言えば、「どうせよ」というより、「何をしてはいけないか」ということを考えればいいのです。駝は自身の言葉を通じて、木に対して、「植えるときはわが子のようにし、その後は捨ててしまうように」するとよい、と、最初に性質をみきわめて、それに合わせて面倒を見てやれば、あとはひたすら、余計な干渉を退けるべきだと強調しています。そ

して同様のことを、役人が「いらぬことをして、人々に災いをもたらしている」と政治にあてはめて語っているのです。最も大切なのは、この「いらぬことをしない」という部分をきちんと書くことでしょう。

二

- ① A これはなかなかの難問です。逆接は二ヶ所ありますが、ここはイ・オいずれも入りえます。けれども、もう一ヶ所の逆接(D)には「しかし」しか入れられません。Aには「たとえそのような状況であったとしても(前に述べた逆境を乗り越える)」という展開をするがゆえに、「それでも」が自然にはまりますが、Dはそうではなく、前と後ろが単に正反対の状況を表しているからです。一口に逆接といっても、箇所によって表現を選ぶことを覚えておきましょう。 B 「音楽の世界」は、「本」以外のひとつの例ですね。 C 「過去」に対して「現代」はどうだろう?と視点を変えています。 E 「かつての時代に戻れない」「これからも～生活していこう」と同じ方向に話が進んでいます。 F 「自分に無理なく読める範囲」＝「スロー・リーディングできる範囲」です。つまり、言い換える接続語が望まれます。
- ③ ア 「スロー・リーダー」について、すなわち、本をどのように読んでいたかの説明なので、本文四つめの形式段落「グーテンベルクに～」に着目します。かつての「本」とはどのようなものであったかを抜き出してつなげば、「スロー・リーダー」にならざるを得なかった事情がわかります。 イ 同じく今度は「スロー・リスナー」ですから、かつての「音楽」の世界の、不自由な事情を探します。こちらは五つ目の形式段落「本に限らず～」の方ですね。ここでどこまでも過去にさかのぼり言えることは「生演奏でしか聴けなかった」ことです。それをまとめて「過去」の制約として考えると良いでしょう。
- ④ 「ひたすら同じ本を読み、同じCDばかりを聴いていた」のは、「お金の余裕が」なくて、そうしなくては仕方なかったからです。ですから、「学生」という年齢的な考え方だけにしばられないよう、注意しましょう。
- ⑤ まともに聴かないCD、まともに読まない本に囲まれているのが「寂しい」状況なので、これとは逆の、④のような状況(何度も何度も同じ本を読んだり、同じCDを聴いたりする)が「寂しくない」状況だということができます。
- ⑥ 「今の世界」と正反対の世界の特徴を答えます。現代は「情報の恒常的な過剰供給社会」ですから、かつての世界はその逆で「情報の非常に少ない世界、乏しい世界」と考えることができます。もちろん、その乏しさは質の問題ではなく、単なる量の問題です。
- ⑦ 前の文からの文章の流れに着目しましょう。「いろいろなタイプの本を読むことは大切。ひとつに凝り固まってしまうと、視野が狭くなる」のように述べているので、「視野を狭めないため」には、「いろいろなタイプの本を読めばいい」ということになります。
- ⑧ 最後の問題ではありますが、着目するところは最初の形式段落になります。「情報が多すぎる」を「本」にあてはめて、「本がありあまっている」ことを述べているのは、文章冒頭だからです。
- 「多すぎる」ことの長所短所を意識しつつ最初の段落を読むと、「選択の幅が広がる」(有り余る本の中から好きなものを選べる)が「長所」であり、「(ありすぎて)なにを読んで、なにを読まなくてよいのかわからない」(だから、安直にベストセラーに流れてしまう)ことが「短所」であると読み取れます。